第３節　光構内の立会調査

１　教育学部附属光小・中学校護岸石積改修工事に伴う立会調査

調査地区　光構内

調査期間　平成12年７月４日

調査面積　約173㎡

調査結果

層序・遺構

平成11年9月の台風18号に伴う高潮により、教育学部附属光小・中学校の御手洗湾沿いに設置されている護岸が複数箇所で崩落したため、護岸の改修工事が実施されることになっ

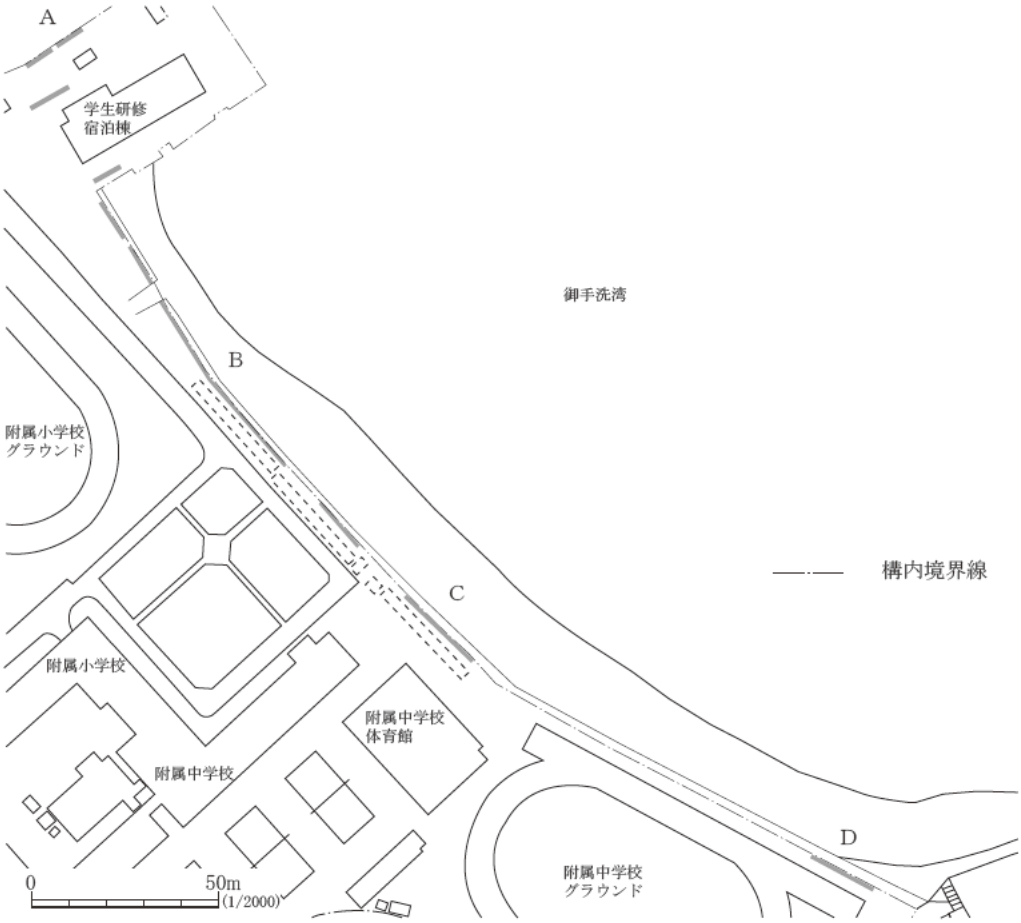

Fig.34　調査区位置図

た。工事では、既設の石垣を除去して、断面を露出させ、新たな石垣を設置することになり、施工時に立会調査を行った。調査の結果、Ａ・Ｄ地点の断面は全て造成土であった。Ｂ・Ｃ地点の一部では、既設の石垣の内側に円礫を使用した石積が確認された。なお、記録類が行方不明のため、層序の詳細は不明である。

遺物（Fig.35, PL.21（2））

石垣の裏込土等から近世～近代の磁器、瓦片が出土した。１はＢ地点出土の蛸壺である。土師質で、復元口径10.5㎝、器高28.8㎝、底径12.6㎝である。胴部に墨書が見られるが消えた部分があるため判読できない。底面には「宮」ともう１文字が書かれるが、消えているため判読できない。これらの墨書は持ち主もしくは地名であった可能性がある[1)]。

小結

今回の調査で確認された石垣の詳細な時期は不明であるが、裏込土出土遺物から近世～近代と推測される。また、Ｂ地点の南側にあたる自転車置場敷地[2)]では、昭和58年度の試掘調査で割石積の石垣が検出されており、埋土から近世～近代の陶磁器類が出土している。以上から、少なくとも近代には御手洗湾沿いに石垣が存在し、その起源は室積会所が設置される近世後半に遡る可能性が高い。以上から、今後も沿岸部における埋蔵文化財の遺存状況と保護に十分な注意を払う必要がある。

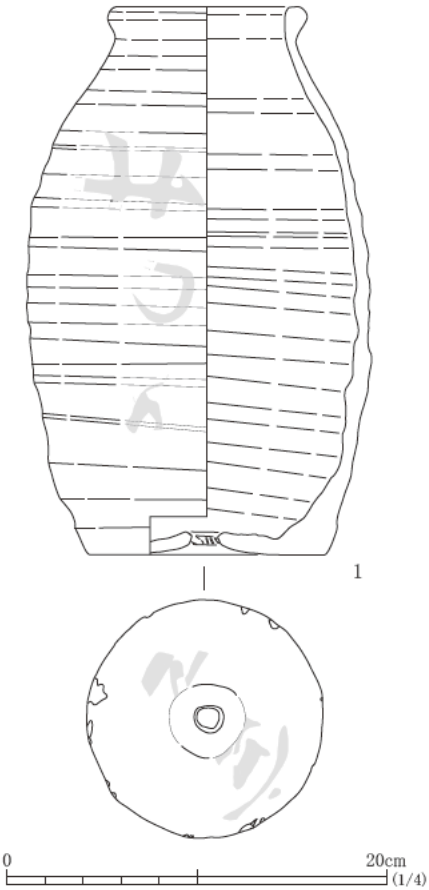

Fig.35 出土遺物実測図

［注］

1）本学経済学部　木部和昭教授に実見していただき、ご教示を得た。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985 年）

2　教育学部附属光小・中学校上水道（給水管）改修２期工事に伴う立会調査

調査地区　光構内

調査期間　平成12年８月10日

調査面積　約23㎡

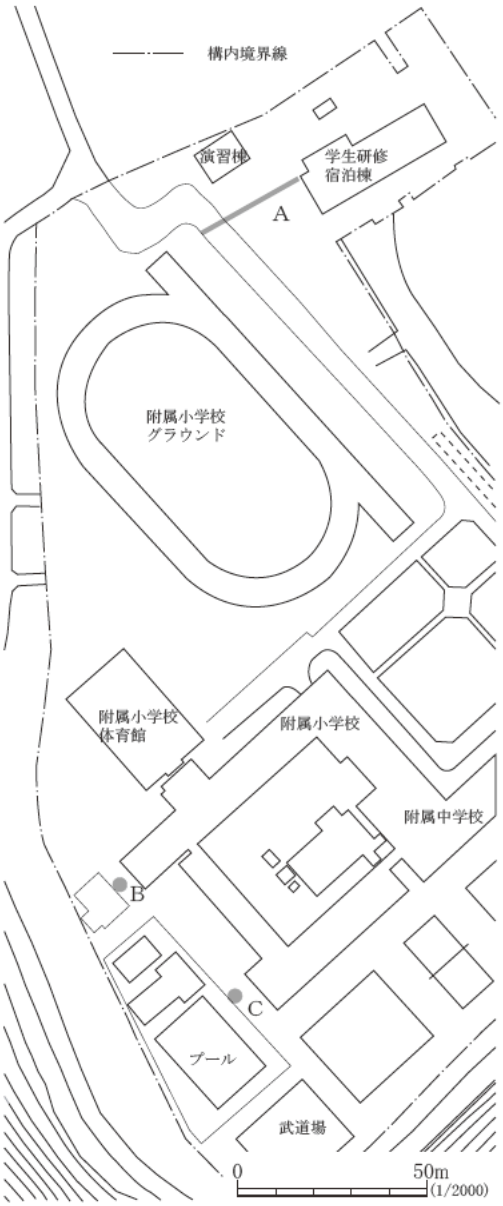

Fig.36　調査区位置図

調査結果

層序・遺構

平成11年度に実施した給水管改修１期工事に引き続き、Ａ～Ｃ地点で給水管改修工事２期工事（既設管取替）が行われることになった。Ａ－１地点（学生研修宿泊棟から南東約1.7ｍ）では、現地表下約103㎝までが表土・造成土・給水管埋土で、以下103～165㎝で灰白色粗砂を検出した。またＡ地点の中央部では現地表下約84㎝で赤褐色土（近世もしくは近代の造成土か）を検出した。Ｂ地点は現地表下約20㎝の掘削にとどまったため、全て造成土の範囲内であった。Ｃ地点では、現地表下約83㎝までが表土・造成土で以下83～140㎝で淡黄色細砂を検出した。

遺物（Fig.37, Pl.21（3））

Ａ地点の灰白色粗砂から土師器、須恵器片、越州窯青磁碗片、石錘が出土した。1は越州窯青磁碗[1]である。胎土は精良で、釉は、灰オリーブ色・オリーブ灰色を呈する。底面と底部側面は回転ヘラケズリを施しており、一部を除いて露胎である。内底面と底部側面に目痕が６箇所ある。復元口径19.0㎝、器高6.7㎝、復元底径（側面より内側）8.2

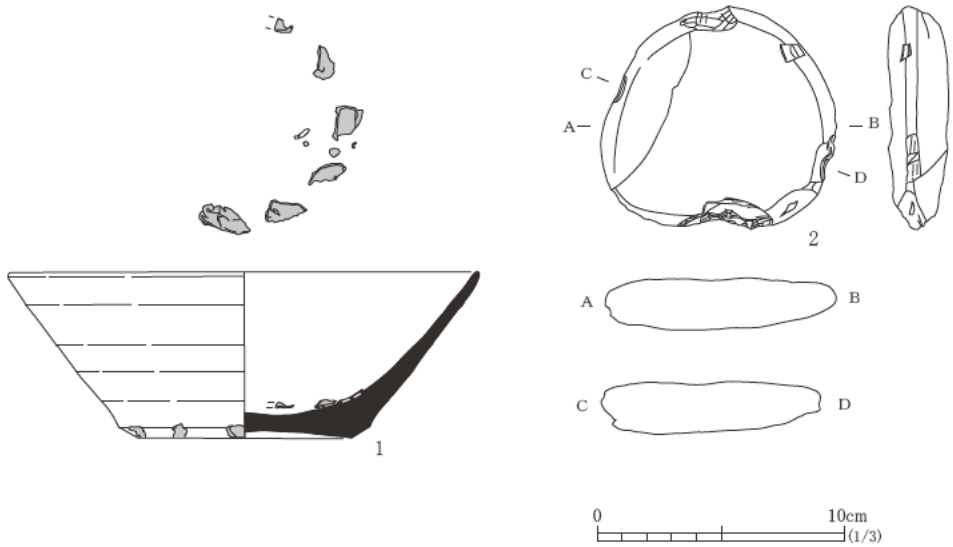

Fig.37 出土遺物実測図

cm。２は石錘である。石質は黒色片岩で、４箇所を打ち欠く。最大長9.4cm、最大幅8.8cm、最大厚2.1cm、重量272.7g。

小結

Ａ地点で検出された灰白色祖砂は平成24年度に実施した下水道接続工事に伴う立会調査[2)]の所見から、近世～近代に形成された層と考えられる。学生研修宿泊棟の南西側は会所関連施設の推定地であり、上記調査と給水管改修１期工事に伴う立会調査[3)]で、近世の埋甕を検出している。出土した越州窯青磁碗は９世紀を中心とする時期が考えられるが、御手洗遺跡では当該期の遺構・遺物がきわめて少なく、貴重な事例となった。

［注］

1）（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室　佐藤浩司氏に実見していただき、ご教示を得た。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光学校下水道接続工事に伴う本発掘調査・立会調査」（『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成 24 年度－』、2016 年）

3）山口大学埋蔵文化財資料館「平成７・10 ～ 14 年度山口大学構内遺跡調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』、2004 年）